

---

# ポイズンガール

藍沢 砂糖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポイズンガール

### 【Nコード】

N2028Y

### 【作者名】

藍沢 砂糖

### 【あらすじ】

「お父さんは私が責任を持って、殺してあげるからね」  
理科準備室を掃除していた夏川奈々瀬は薬品棚の奥から古いプリント用紙を見つけた。それはお互いの食べ物に仕掛けをしあうサイババルゲームの進行表だった。興味本位で友人達とゲームを始めた奈々瀬だったが、ゲームは異常な程に加速してゆく。

正義の味方、笹中悟はちよつとしたきっかけで人を殺してしまった。正義の味方から殺人犯に転落した悟は自らの正義を守るために力いっぱい逃げ出した。たとえ誰に悪者だと罵られても、自分は正

義の味方でい続けなければならない。悟の逃亡生活が始まる。  
そして奈々瀬と悟の運命は交差する。

## 非日常の扉

選択を間違えれば、分かっているよね。

遮光カーテンを閉め切った薄暗い理科準備室に、揺るぎのないはつきりとした声が響かずに充満した。密閉された狭い部屋の空気は凝っていて息苦しい。

放課後の校舎は昼間の賑わいが嘘だったかのように静かだった。まだ部活や補習で残っている生徒が沢山いる筈だが、この密室には一切の音が入ってこない。まるでこの校舎には、いやこの世界にはここにいる五人以外消えてしまったのではないかという程の静まりようだった。

ここは別世界だ。

蒸し暑さと息苦しさに加えて薬品特有の鼻を衝く臭いまであり、偏頭痛を引き起こすにはこれ以上ない条件の環境だった。

実験用の水道付きの大きな机に置かれた二つのピーカーには黒い液体がなみなみと注がれている。その前の丸椅子に着いた夏川<sup>なつかわ</sup>奈々瀬は、ぶつぶつと細かい泡が浮き上がってくるそのどす黒い液体を無表情に見ていた。

声は再び聞こえる。

「見たって分からないよ。どっちも同じ色」

薄い口唇をおもむろに舌で湿らせた奈々瀬は声のする方に刃物のような鋭い視線を向ける。机の向かい側には、薄笑いを浮かべながら長い髪を指先で弄ぶ篠原<sup>ひのはら</sup>紗季が頬杖をついて奈々瀬を舐めるように見ている。

紗季は更に続ける。

「選択を間違えれば…」

死ぬよ。

そう結んで愉快そうに目を細める紗季。

立合人である他の三人も心配そうに、あるいは何かに期待しながら

ら奈々瀬と紗季を交互に眺めている。何も答えずに大きく息を吐いた奈々瀬は、制服のブラウスのボタンを一つ外して襟元を摘まんで扇ぐ。

暑い。奈々瀬の耳の裏側から垂れた汗の滴が首筋をつつと伝い、露わになった彼女の白い胸元を濡らす。

そして奈々瀬が初めて声を発した。

「ズルはしてないんだよね。誓える？」

当たり前じゃないの、と吐息混じりに答えた紗季は机の上に両肘をついて手を組み合わせた。祈りを捧げているように組んだ両手の奥から二つの瞳が奈々瀬を真っ直ぐに捕らえている。奈々瀬からは彼女の口元は見えないが恐らく、笑っているのだろう。

どちらかと言えば紗季の事は嫌いではない。

しかし彼女がこのように時折見せる薄笑いとは実験動物を観察するかのような無機質な視線だけはどうしても好きにはなれなかった。

紗季は口元を隠したまま言う。

「ビーカーに入っているのは正真正銘どこにでも売ってる普通のコーラ。ただし、片方はハズレだけだね。それは奈々瀬も解ってるでしょ」

語尾を釣り上げて首を傾げる紗季。

「選択権は奈々瀬にあるんだから、どちらでも好きな方を飲みなよ。私はいくらでも待ってあげても良いんだけどね、他の皆が退屈しちゃうじゃない」

組んでいた手を解いて口元を露わにする紗季。やはり彼女は、笑っていた。紗季は胸まである長い髪を人差し指に絡ませて遊んでいる。

奈々瀬も同じように小さく笑った。

「そうだよ。紗季は勝負事でズルするような馬鹿じゃないもんね。確率は二分の一で条件は私も紗季も同じ。片方は普通のコーラでも片方は…」

「毒入りだよ」

紗季は奈々瀬の言葉に被せてぎよろりと目を見開いた。

彼女は胸ポケットから茶色い小瓶をゆっくりと取り出して奈々瀬に見せつけるように軽く振る。赤く濁った液体が瓶の中でちゃぷちやぷと踊った。

奈々瀬は全く動じず無表情のままだったが、周りで見ている立会人の誰かがごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。

奈々瀬と紗季は互いに視線を外す事なく見詰め合っている。

毒を用意してきたのは紗季だが、どちらかのピーカーに毒を混ぜたのは立会人の一人、ピーカーをシャッフルしたのは別の立会人、その二つのピーカーを机の上に置いたのもまた別の立会人。

つまり、この場にいる五人ともどちらが毒入りかは判らない。

「どうしたの、奈々瀬。もしかして…ビビっちゃった？」

なんなら私が代わりに飲んであげても良いんだよ、と紗季は挑発してくる。彼女はいつもこうして精神的に揺さぶりを掛ける。この余裕の表情から発せられるプレッシャーに押し潰されて判断を誤った者が今まで何人いた事か。

一見動じていないような奈々瀬も内心では追い詰められている。

紗季の冷たい瞳は「早く飲め、早く毒を飲んでのた打ち回れ」と急かしてくる。それでも奈々瀬はその瞳から視線を外さない。

目を逸らしたらプレッシャーに負けたという事だ。精神的な負い目を感じてしまう、そうなってしまえば紗季の思うつぼだ。

奈々瀬の顎先から汗が一滴落ちる。

それは机の上に零れ、ひたりと小さな音を立てた。

「あら、暑いかな？」

紗季は彼女の汗が落ちるのを目敏く見ていた。この一言は、一拳手一投足を漏れなく見られているというプレッシャーになる。このまま心理戦で紗季に勝利する事はなかなか容易ではない。

すると紗季は目を再び細めた。

「それにしても奈々瀬ったら凄い汗だね」

「何なのよ、さっきからいちいちうるさいわね」

しまったと思いつながら、もう遅い。紗季の挑発に乗ってしまったのだ。下手に相手をするとな女のペースに巻き込まれ兼ねないのは十分承知の筈だったが、つい言い返してしまった。

案の定、更に紗季が畳み掛けてくる。

「ブラウスもぐっしり濡れてるじゃない。ホント女子高で良かったね。そんな汗だくの姿、男の子に見られたくないでしょ」

今度は無視した。

しかし奈々瀬が一度相手をしてしまった事に付け込むように、紗季は蛇のように湿気を孕んだいやらしい目で奈々瀬を見ている。

実際、奈々瀬は暑さと緊張感の所為でかなりの汗をかいていて、汗でブラウスがじっとり背中に貼りついて下着の線が浮き上がっている程だ。確かに思春期の男子には見せられない。薄暗い部屋で奈々瀬の細く締まった<sup>からだ</sup>躰のラインが露わになっている様はどこか官能的だ。

「ところで、どうするの。恐いんだったらホントに私が代わりに飲んであげても良いんだよ」

「冗談言わないで。私が飲むに決まってるじゃん。紗季こそ落ち着きなくぺらぺら口数が多いけどホントは私がアタリを引くのが、負けちゃうのが恐いんじゃないの？」

ほんの僅か、紗季の表情が変わった。

「へえ、そんな事言うんだったらさっさと飲んだら良いじゃないの」  
さあ、と催促してくる紗季。

意を決した奈々瀬は、勢いよく立ち上がって右側にあつたビールを手に取った。三人の立会人の視線が奈々瀬の右手に集中する。数秒遅れて紗季もゆっくりとビールカーに目を向けた。

「ホントにそっちで良いの？」

「今更変えないよ」

「そっちが毒入りかもしれないよ？」

「だから、これで良いんだってば！」

まだしつこく揺さぶってくる紗季に対して苛立ちを覚えた奈々瀬

は、彼女に向かって怒鳴りつけた。しかし暖簾に腕押しと言ったような様子で紗季は相変わらぬ薄笑いを浮かべている。

奈々瀬は手に取ったビールを見詰める。

「奈々瀬、ルール分かってるよね。一度これで良いつて宣言したらもう変更はきかないんだよ」

分かってるよ、と返す奈々瀬。

そしてもう一つのルール。飲むときは一気に飲み干さなくてはならない。奈々瀬は頭の中でそのルールを思い浮かべて、大きく深呼吸をした。

そして。

奈々瀬はビールカーの中身を一気に喉に流し込む。

その様子を紗季と三人の立会人は食い入るように見ていた。期待と不安の入り混じった表情の立会人達に対して、ただ一人紗季だけは感情の読めない冷やかな目で奈々瀬の喉の動きを観察していた。飲み干した奈々瀬が机に、割れてしまいそうな勢いでビールカーを置く。息を切らしている奈々瀬の姿を四人はじっと見ていた。

そして。

奈々瀬は机に突っ伏すように倒れ込んだ。彼女は真っ赤な顔をして言葉になっていない苦しげな呻き声を上げる。

奈々瀬！ と立会人達は悲鳴にも似た声を上げた。

紗季は今まで通り上品に笑っている。

「ほら、言ったでしょ。そっちが毒入りかもしれないよって。ホントに人の忠告はちゃんと聞くもんなんだよ」

獣のように唸って喉を掻き毟る奈々瀬を見下ろして悦に浸る紗季は、まさに悪魔のように邪悪な高笑いを上げた。机に這いつくばる奈々瀬は充血した目で絶<sup>すが</sup>えるように紗季を見ている。そしてがたがたと震える手を勝者の彼女に伸ばした。

「負け負け負け、奈々瀬の負けよ」

目に涙を溜めて見上げる奈々瀬を切り捨てた紗季は本当に愉快そうに、映画に出てくるような悪い魔女に似た甲高い笑い声を上げて

いる。

立会人達は目の前で起こる凄惨な様子を信じられないといった様子でいる。その中で最初に落ち着きを取り戻した一人が別のビールに水を汲んで奈々瀬に差し出す。しかし奈々瀬にはそれすら目に入っていないようだ。

悶え苦しむ奈々瀬をしばらく見て満足したのであるう紗季は、安全なもう一つのビールを手を取った。

「思いつきり笑ったから喉が渴いたわ。これは勝利の祝杯として頂いてあげる。のた打ち回る奈々瀬を見ながら飲む勝利の美酒って所かな」

勝利とは敗者を踏み躪にじるところに美德があると考えている紗季。

本当に性格が悪い。紗季は悶える奈々瀬を見下ろしてビールに口を付け、手首を傾けた。

そして優雅に喉に流し込む。

「ばーか」

奈々瀬の声だった。

「引つかかったな。何が勝利の祝杯だよ、私が飲んだのは普通のコーラだったよ」

何事もなかったかのように立ち上がった奈々瀬はブラウスの袖で口元を拭った。周りの皆は目を丸くしている。中でも一番驚いて目を白黒させているのは勿論、勝利を確信していた紗季本人だった。

次の瞬間、ガラスが割れる音が凝った空気を切り裂く。

紗季がビールを落とした。それと同時に紗季はその場に崩れ落ちて、汚れた床の上でのた打ち回る。目を真っ赤に充血させてぼろと涙を零す紗季から、つい一分前までの傲慢な姿はもうつかげえない。

痙攣の始まった紗季を、奈々瀬は悠々と見下ろして、ぽつりと零した。

「残念、私の勝ちみたいだね」

奈々瀬は艶つぼく濡れた舌を出して笑った。

夜の湿った空気はアスファルトの匂いをまとっている。

高速道路の高架とそびえる古い工場に切り取られた濃紺の狭い夜空に、不細工で形の悪い下弦の月がふわりと浮かんでいた。

生ぬるい気温とは裏腹にこゝろなつかし笛中悟は少し冷たい汗をかいていた。

…もしかすると、

…あの事を。

街灯も疎らで、足元も良く見えない暗い場所に立っているのは悟と、もう一人は鮫島と名乗る胡散臭い男。悟はこの男の事を知らない。

和柄のアロハシャツに胸元には金のネックレス。猫背で不健康そうな鮫島はどう見ても性質たちの悪いチンピラだった。この男とは初対面だが、自分にとってプラスになるような人物ではないという事は判断できる。

「いったい何の用なんです、話ならこんな所じゃなくてファミレスとかでも良いんじゃないですか」

悟は静まり返った夜の世界に耐え切れずに第一声を発した。しかし鮫島はその問いには答えず、にやりと笑って並びの悪い歯を見せた。

「まあそう焦るなよ。一応確認しとくけど、アンタ笛中さんで間違いないんだな？」

悟は一瞬戸惑って曖昧に頷く。

「そうだよな。笛中悟、二十七歳だっけ。間違いないよな。ホント会いたかったぜ、笛中さんよ」

鮫島は先の曲がった煙草に火を点けた。

フルネームも年齢も正しい。どうやら人違いではないようだ。

「だから何の用なんです」

悟は少し語気を強める。

「そんなに焦るなつて。ゆっくり説明してやるから」  
いやらしく笑う鮫島は口と鼻から一緒に煙を吐いた。

今まで真面目に生きてきた悟はこの手の人種が一番苦手で、学生の頃も所謂不良と呼ばれる者を極端に避けていた。恐かった訳ではないが、関わりと自分まで馬鹿になると思っていたからだ。

会話を交わすだけで吐き気がする。

こんな人物が自分の名前を知っている事に嫌悪感を覚えた悟は眉間にしわを寄せて鮫島から視線を外した。にやにやと頭の悪そうな緩んだ顔をしている鮫島を見ているとだんだん腹が立ってきた。

学生時代に空手を経験している悟は、たとえいきなり襲われてもその状況を打開する力も十分あるし、鮫島より背も高い。この男が自分に何らかの因縁をつけて絡んできたのだとしても、腕力では勝る自信がある。だから鮫島に嫌悪感と不信心はあっても、恐れは雀の涙ほどもない。

それでもこの手の男は何をしでかすか分からない。

人差し指と親指で煙草を摘まんでいる鮫島は煙を吐きながら爬虫類のような目で悟を舐めるように見ていた。

なかなか話を切り出そうとしない鮫島に対して悟は苛立ち始める。  
「用がないならもう帰りますよ」

吐き捨てるように言った悟は踵を返す。すると「ちょっと待てて」と、鮫島のしゃがれた声が背中越しに聞こえた。

「何です」

苛立ち混じりに言った悟は振り返って迷惑そうに鮫島を睨みつける。鮫島の相変わらずの不愉快な笑みが悟の神経を逆撫でした。

そして鮫島は勿体ぶったように溜めてから口を開いた。

「先月だったかなあ」

悟の背筋が凍った。

「もしかすると、」

「あの事が。」

明らかに顔色が変わった悟を見て、鮫島は更にいやらしく顔を歪

ませる。まるで獲物に巻きついた蛇のようだ。

「先月…？」

「そうだよ。確か夜の十時頃かな。郊外の国道。ほら、海沿いの工場が並んでる所らへんだよ。アンタその辺り車運転してただろ？」

そう言った鮫島の視線は真っ直ぐに悟の目を捕らえていた。疑問形ではあるがその目が確信を得ている。

「ああ、仕事の帰りに毎日その道を通っていますが。それが何か？」  
平静を装ってみたものの、声は震えている。

鮫島はそれを見逃さない。

「アンタ…そこでイケナイ事しなかったか？」

…イケナイ事。

おもむろに首を傾けて悟の顔を覗きこんでくる。煙草臭い。自分の言葉にどんな反応があったか、どれだけ弱ったか、観察されているようにこの上なく居心地が悪い。顔を顰めた悟は思わず身を引いた。

「何の事ですか…」

「トボケンな！」

鮫島のどすの利いた怒声が人気のない夜の高架下に響く。悟は大きな体をぴくりと引き攣らせた。今までの表情とは一転して鮫島は鋭く悟を睨んでいる。

悟が怯んだのを確認すると、鮫島は直ぐににやけ面に戻った。

「笹中さんよお。アンタその夜、そこで人を撥ねただろ…」

その言葉は悟の胸を貫いた。

喉がからからに乾き、視界が霞んでくる。人を撥ねた。その言葉が悟の頭の中で跳ね回って何度も反響する。

「何かの間違いじゃないでしょ…」

「そんなワケねえよ。アンタは誰にも見られてないと思ってたか知らねえけど、俺はこの目でしっかり見たんだからよ」

口籠った悟。その額に冷や汗が滲む。

…視られていたのか。

「暗かったって言っても、あれだけ派手に吹っ飛ばしたんだから気付いてないワケじゃないだろ。間違いないよ」やっちまった」って分かっているはずだ。それでもアンタは、ほったらかしでそのまま走り去った。つまり……」

轢き逃げってやつだろ。

鮫島は悟の反応を楽しむかのように溜めてから言った。

「僕はそんなの知らない、僕が轢いたって証拠なんてあるんですか！」

「証拠？ 今アンタがここにいる事が証拠なんだよ」

「どういふ事ですか、と必死に取り繕って返す悟。煙草を一口吸って、悟から滲み出る動揺を確かめるようにしてから鮫島は言う。

「轢いたヤツの車のナンバープレート控えさせて貰ったんだよ。ナンバーからちよつと調べたら名前と住所と連絡先は分かる。それで今日呼び出したらアンタが来たってワケなんだよ」

この男を蛇と形容したのは間違いではなかった。

アンタは立派な犯罪者なんだよ、と言って蔑んだ目を悟に向ける。轢き逃げ、犯罪者。テレビや新聞でしか見聞きした事のないような言葉を自分に突きつけられた悟は真っ青になっていた。冷たい汗が背中に湧く。

「本当に気付かなかったんだ。暗かったし、あの時は急いでいたから人を撥ねたなんて分からなかったんです。もしそれが本当なら、今から……出頭してきますよ」

悟はそう言っただけで俯いた。

「ウソつけ。往生際が悪い野郎だ」

青ざめた顔で鮫島の顔を見ると、彼は実に愉快そうに笑っている。今の悟とはまるで正反対の表情だ。

「何が気付かなかっただよ。撥ねた後、一回車止めて出てきただろ。それでアンタは轢いた男をきっちり確認してたじゃねえか。それでいてアンタはそのまま車に乗って何事もなかったように逃げたんだ。結局後で救急車は来たんだけどアンタが轢いたオッサン、意識無か

つたぜ。可哀想に、あのオツサン死んじまつたんじゃねえかな」  
うう、と漏らして言葉が出てこない悟。

「出頭するなら勝手にしろよ。ただ、普通の交通事故と違って轢き逃げは罪が重いぞ。もし相手が死んだりしてたら罰金ぐらいじゃ済まねからな、もしかしたらムシヨに入って何年も出て来れないかも知れねえぞお」

にへらにへらと粘着質のある笑みを浮かべて、鮫島は弱り切って頂垂れる悟の表情を下から覗き込む。煙草臭い息が悟の顔にかかる。追い詰められた。

悟はその場に崩れ落ちるように、アスファルトの上に膝をついた。そして頭を抱えて亀のように丸くなった。

「今…。今ホントに大事な時なんだ。だからバレる訳にはいかなかつたんだ」

涙声で語る悟を、鮫島は冷たく見下ろしている。

鮫島のような、社会の底辺にいるようなガラの悪い人間に話しても理解できないだろうが悟は構わず胸中を話し始めた。

「幸せにしたい人がいるんだ。来年の春、僕はその人と結婚する事になってる。でももしあんな大事故を起こしてしまったとなると、会社をクビになるかもしれない。世間体だつて悪くなる。そんな事になったら彼女を幸せにする事なんて出来なくなる。人生めっちゃくちゃだ」

こんな人間に言つても無駄だと分かつていても、思わず身の上を語つてしまった事に自己嫌悪を覚える。ふうん、と案の定どうでも良いような相槌を打つ鮫島。矢張りこんなチンピラには自分の気持ちなど理解できないんだと悟は歯を食い縛る。

すると鮫島は蹲る悟の前に屈み込んだ。

「そこでアンタに相談なんだよ、笹中さん」

鮫島は馴れ馴れしく悟の肩に手を置いた。その手に汚らわしいものを感じた悟は小さく身震いする。

「相談？」

「ああ、警察には言わねえよ。俺だって警察は嫌いだからなあ。それに、どうせならアンタにはそのまま幸せになつて欲しい」

警察が嫌いと言うのは本当だろう。しかし、後に言った言葉は明らかに心が籠つておらず嘘臭い。

「黙つててくれるんですか！」

「勿論さ。ただし条件がある」

悟はふと顔を上げた。そこには本物の蛇のように冷血で人間味のない目をした鮫島の顔があった。

「俺も金に困つていてね。リーマンやつてるアンタは少なくとも俺よりは金もつてんだろ？ ちよつと分けて欲しいんだよ」

「口止め料つて事、か……」

どこまでも腐つた人間だ。

「そういう事だ。三百万ほど用意してくれねえか？」

「さ、三百万！」

驚嘆する悟に対して、鮫島は至つて当然の事のような顔をしている。しかし一般的なサラリーマンである悟にとって現実的な額ではない。

「借金とかすれば無理な話じゃねえだろ」

「でも……」

「良いのか、周りにバレたらアンタの人生めっちゃめっちゃになるんだろ。明後日まで待つてやるから工面してくれや」

額に冷や汗と脂汗が混じつた物が滲む。

「そんな…明後日までに三百万なんて無理だ…。用意出来る訳がない」

「まあ、頑張つてくれよ」

悟の肩をぽんと叩いて鮫島は立ち上がった。そして短くなった煙草を指で弾く。放物線を描いたオレンジ色の火は工場の塀にぶつかつて弾けた。

鮫島は膝をついたままの悟に「連絡待つてるからな」と言い残してから、背中を向けて歩き出した。その言葉も悟の耳には届いてい

ないようだ。

破滅、三百万。

二つの言葉が悟の頭上でめまぐるしく回転している。

「あ、そうそう」

立ち去りかけていた鮫島がふと振り返った。

「カナちゃんだっけ」

その名前を聞いて悟の首筋は冷たくなった。

「確か香那<sup>かな</sup>って言ったよな、アンタの彼女。色白で、真面目そう  
けっこう可愛い娘だよなあ。羨ましいなあ」

顔を上げて目を見開く悟。全ての血液が逆流するような感覚が彼を襲った。

「もし笹中さんが無理だつて言うんだつたら、アンタの彼女に頑張ってもらおうかな。文字通り体張つて。胸も大きいし、けっこう良いセンいくと思うぜ」

鮫島は下品な舌なめずりをした。

…香那。

悟の心臓が冷たい血液を全身に送り出して巡らせている。鼓動が高まれば高まるほどに体温が下がってゆく感覚がした。

「香那は関係ない。これは僕だけの問題でしょう!」

「知らねえよ、そんな事。とにかく金になれば良いんだ。お前の女を守りたけりゃ明後日までに三百万用意しとけよ」

鮫島は野卑な笑い声を上げて背を向ける。

歯を食い縛つて悟は拳を握りしめた。香那だけは、香那だけは巻き込みたくない。悟にとって彼女は全てだった。

愛している。

彼女の笑顔も、しっとりとした髪も、ふっくらした口唇も、柔らかな肌も、澄んだ声も、甘い香りも。彼女の全てを愛している。この先、死ぬまで一緒に生きてゆきたい。この世で唯一、そう思える女性だった。

純潔で純粋な香那の汚れる様など想像もしたくない。

「アンタが明後日までに金を用意できない事、ちょっと期待してんだぜ」

鮫島は歩きながら言った。

「実はよ…アンタの彼女、思いつきり俺のタイプなんだわ。こう見えて俺ってあんな感じの真面目で従順おとなしそうな娘が結構好きなんだよな。そんな子が調教されて夜の店に売られるなんて、想像しただけで興奮してくるぜ」

どくん、と悟の心臓が大きく打つ。

香那が見ず知らずの男の前で肌を露わにし、その体を触られ、舐められ、貪られる。その光景を想像しただけで視界が黒く霞んだ。

「あの娘の調教するのが楽しみだ。最初は泣くかもしれないけど、大概の女は一か月もあれば慣れちまうんだ。女って俺らが思ってるよりスケベな生き物だぜ。完成したらアンタにも見せてやるよ、淫乱な香那ちゃんをな」

鮫島はいやらしい想像をしながら歩き去ろうとしている。

…香那に手を出すな。

卑しく汚らわしい鮫島に香那の名前を口にされる事でさえ嫌悪を覚えるのに、この男は頭の中で香那を凌辱している。悟は許せなかった。しかし自分が三百万という大金を用意しないと香那は魔の手まのてに落ちてしまう。

そうなると香那は自分の知っている純潔で純粹な香那ではなくなってしまう。

…嫌だ、香那を失いたくない。

香那が香那でなくなってしまう事は、悟にとって全ての幸せと未来を失うのと同じだった。香那の笑顔が頭の中に儚げに浮遊する。

…誰が悪いんだろう。

あの夜、一人の男を撥ねた自分自身だろうか。あんな時間に夜道を歩いていた撥ねられた男だろうか。それとも遅くまで残業をさせる会社だろうか。悟の中で様々な悪の根源が巡る。しかしどれも違った。

悟は目の前で背を向けている男を見た。

…こいつだ。

…こいつさえいなければ。

悟は脇に置いてあったコンクリートブロックを両手で拾い上げて、よろめきながら立ち上がる。それは冷たく重く、いびつな断面が悟の指に食い込んだ。

鮫島は姿勢の悪い蟹股がにまた歩きで真っ暗な夜道を進んで行っている。

その後を悟が音を立てないように近くに近付いてゆく。

こんな男、いない方が社会の為なんだ。

そう何度も自分に言い聞かせる。すると鮫島は煙草に火を点ける為に立ち止まった。その背後に悟が静かに忍び寄るが、鮫島が気付く様子はない。鮫島の背中に手が届く程の距離まで来た時、悟はこくりと唾を飲んだ。

そしてブロックを大きく振りかぶり、鮫島の後頭部めがけて振り下ろした。

軽い感触の後に低い呻き声。鮫島は大きくよろめいてはいたが倒れなかった。どうやら後頭部には命中せず、側頭部を掠めただけだったようだ。不意を突いて一撃で決めるつもりだったが失敗してしまった。

悟の全身から冷や汗が噴き出る。

「てめえ…何のつもりだ！」

頭から血を流す鮫島は僅かに恐怖の混じった声で言った。まさか温厚そうな悟が攻撃してくるとは思っていなかったのだらう。

「香那には、手を出させない…絶対に」

目を合わせた瞬間に鮫島は恐ろしい獣と対峙したかのようにぴくりと引き攣った。悟はブロックを再び握り直して、鮫島の頭部に叩きつける。骨の軋む鈍い音に続いて、泣き声に似た悲鳴を上げる鮫島。

今度も狙いは外れたが、咄嗟に頭を庇った鮫島の腕と指がへし折れ潰れた。

「や、やめろって、彼女には手エ出さねえから。な、な？」

悟は聞く耳を持たない。

媚びるような目をした鮫島に更にブロックを叩きつける。顔面に当たり、とうとう鮫島はその場で仰向けに倒れた。

「痛てえ、痛てえよお」

鼻血を垂らしてアロハシャツを汚す鮫島の上に馬乗りになる悟。

再びブロックを大きく振りかぶった。悟は潰れた手で顔を守ろうとする鮫島を見下ろした。

そして顔面めがけて重いブロックを振り下ろす。

何度も何度も。手で守ろうとしてもお構いなしに、歯が折れようともお構いなしに、許しを請われてもお構いなしに。

この手のチンピラの言う事は信用できない。「もうしない」「何でもするから」と口では言っておきながら、後で必ず仲間を連れて報復に来るに決まっている。だから二度と会う気も起こらないように徹底的に痛めつけるべきだ。

鮫島の鼻は折れて曲がり、歯も何本かなくなっている。鼻腔や口から血が溢れて呼吸を遮っているのか、鮫島は苦しげにごぼごぼという音を鳴らしていた。その赤黒い血は悟のズボンにもかかり、形の不揃いな水玉模様を作っていた。

このまま殺してしまっても良いのではないか。

悟はそうとさえ思った。こんな人間、一人この世からいなくなつたところで悲しむ者などいないだろう。

寧ろいなくなった方が皆喜ぶかもしれない。もしここで本当に自分と香那から手を引いたとしても、また他の誰かに同じような脅迫をするに決まっている。それならここで殺してしまうべきだ。

悟は無情なほど淡々と、単純作業のように鮫島の顔面を潰していた。鮫島は時々血反吐を出すだけで抵抗すらなくなり、顔ももう原型を留めていなかった。

あんた、何やってるの！

ふと背後から甲高い叫びが突き刺さり悟は我に返った。立ち上が

つて振り返ると、一本道の奥に柴犬を連れだした中年女性が悟を見て震えている。

「け、警察呼ぶわよ」

女性は悟の姿を頭の前から足のつま先まで見渡しながら威嚇姿勢を取っている。はつとなつた悟は凶器となつた血塗れのブロックをその場に捨てた。

「あの…違つんです…」

悟が弁解しようと女性に歩み寄ろうと足を踏み出したら、その女性には短い悲鳴を上げて後ずさつた。顔にまで返り血を浴びた悟と、その足元には顔面を潰され動かなくなつた鮫島の姿がある。

誰がどう見ても悟が悪者だ。

「僕はこの男に脅されて…」

一方的な悪者という誤解は解いておかなくてはならない。悟が腫れ物に触れるように慎重に女性に近寄ろうとする。

「誰か助けて、殺される！」

夜を切り裂くような悲鳴。更に叫んだ内容もサスペンスドラマのように分かりやすい。悟は思わずその場でたじろいで後ずさつた。

今の悲鳴の所為か、近くの何軒かの住宅の窓に電気が灯つた。

気が動転した中年女性はまだ訳の分からない事をわめき散らしている。このままだと警察が駆けつけて来るのも時間の問題だ。

悟の足元では鮫島が血の混じつた真つ赤な泡をぶくぶくと口から溢れさせている。この状況を見ると、どう考えても自分が加害者だ。警察に捕まると傷害罪に問われるし、更にこの前の轢き逃げの件もばれてしまう。

そうなつてしまえば未来はない。

「仕方なかつたんだ、僕は悪くないんだ」

悟はがたがたと震える足を無理矢理動かして、その場から逃げ去つた。背後から女性の喚き声が響き続ける。

…僕は悪じゃない。

悟は走つた。

未来を、幸せを守る為に。

冷蔵庫を開けた奈々瀬はビーカーにミネラルウォーターを汲んで一気に飲み干した。そして直ぐに同じビーカーにもう一度汲み直す。「ほら、紗季も飲みなよ」

流し台に顔を突っ込むようにして咳込んでいる紗季に水の入ったビーカーを差し出すと、彼女も一気に飲み干して、机の上に乱暴にビーカーを置いた。「実験器具は大事に扱いなさいよ」と奈々瀬がからかっても紗季は無視して水道の蛇口を捻って水勢を増した。

「どう、生き返った？」

「全く…まだ喉が焼けるように痛いよ」と紗季。

彼女は泣き出しそうな顔をして水道で何度もうがいしている。その様子を見て奈々瀬は笑った。

「ハズレのコーラにはタバスコ一本全部入れようって言ったのは紗季でしょ。完全に致死量越えてるじゃん。私達は反対だったでしょ」  
紗季はぐうの音も出ない。

紙町女子高等学校、科学部三年の五人組は理科準備室に集まっていた。

九月になって新学期が始まり、彼女達の部室兼活動場所である理科実験室の掃除と荷物整理をしている途中に、いつのまにかタバスコロシアンルーレットが始まっていたのだった。

気が付けばもう夕方。

片付けもほとんど終わらない内に日が暮れようとしていた。

流し台に立ってビーカーを洗うのを手伝う奥山アルマおくやまは、奈々瀬と紗季を茶色い瞳で見比べて感心したように言う。

「紗季のブレッシャーの掛け方すごいよね。見てる方まで緊張したよ。やっぱ特進クラス同士の心理戦って見応えあるね」

「特進クラスだからってこんな遊びには関係ないでしょ」

念入りに口を濯ゆすぎながら紗季が答えた。喉がひりひり痛むのか何度も咳払いを繰り返している。

そんな彼女を見てアルマは口元に手を添えて上品に笑った。腹を抱えて大笑いという姿は、育ちの良いアルマからは想像もつかない。紗季は口に含んだ水を流しに吐いた。

「ああ、まだ舌が痛い…。このタバスコドリンクって、みんなが思ってるよりずっと強烈なんだからね。嘘だと思っただったら飲んでみなよ、そのお人形さんみたいな顔も不つ細工に歪むよ、きつと」  
心なしか紗季の声はがらと濁っている。

「そんな事言われたら飲むわけないじゃん」

洋画の女優がするような手のひらを上に向けて首を傾げる仕草も、混血であるアルマには良く似合う。

「くっそー。その前にこの借りは絶対に返すからね、奈々瀬！」

いつでもどうぞ、と返して奈々瀬は舌を出した。

「これで紗季とは五勝五敗一分ね。今の所イーブン。もう次の勝負で決着にしようじゃないの」

「五勝五敗一分。そうよ、あの引き分けさえなければ今日で決着だったかもしれないのねえ、くるみちゃん…」

紗季はタオルで口を拭きながらじろりと小宮こみやくるみを睨みつけた。くるみは頭を抱えて小動物じみた素早い動きで机の影に隠れようとする。待ちなさい、と奈々瀬に鋭く呼び止められると、申し訳なさそうに顔を出した。

「いや、その…あれはですね」

弁解しようとするくるみを二人が睨む。もめている原因は夏休み前に行われたワサビ寿司ロシアンルーレットの事である。

「アンタの中途半端な優しさが、この争いを生んだんだよ」

「あ、ああ…申し訳ない」

くるみは申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた。

ワサビ寿司の時の戦いではくるみが「毒」を仕込んだ。しかしワ

サビの量が少な過ぎて、刺激物に免疫のある二人にはどれがハズレか判らず、結局二人で美味しく寿司を堪能しただけという和やかな結果に終わってしまったのだった。

「もう済んだ事だから良いんだけどね」

じゃあもう怒らないでよ、と小声で洩らしたくるみは二リットルのペットボトルに入れて常備しているウーロン茶をごくごくと飲む。気の小さい彼女は、拙い状況に陥ると緊張の所為で酷く喉が渇くらしく、その都度ウーロン茶をがぶ飲みするのだ。どこか愛嬌のある憎めないその姿も科学部の名物になっている。

「ところで次はどんな勝負するの？」

ビーカーを洗い終えて水滴を切るアルマは期待するような目で奈々瀬と紗季を見比べていた。

「そうだなあ。例えば、フグ刺しロシアンルーレットとか？ くるみが適当に捌いたフグ刺しを交互に食べるの」と奈々瀬。

「いやいや、それってマジで死んじゃうじゃん。トテロドトキシンだっけ。神経毒を甘く見ちゃ駄目だよ」

苦い顔をして首を横に振る紗季。

「冗談だつて、流石に死んじゃつたら洒落にならないでしょ」

準備室の片づけを続行しながらも、頭の中は面白いゲームについての事でいっぱい科学部メンバー。次は誰が、どのような物を口にして醜態をさらすのだろうという事ばかり考えていた。

奈々瀬はカーテンと窓を開けて空気を入れ替える。

夏の終わりと秋の始まりを告げる涼しい風が吹き込んできた。入り込んできた新しい空気に、薄いガラス窓がみしりと軋む。

三階の理科準備室の窓からは中庭が見える。昼休みにはベンチに座って学食で買った昼食を食べる生徒達で賑わっている中庭も、今はもう誰もいない。池の水面が真っ赤な夕焼けを寂しげに反射させているだけだった。

ふと、秋の匂いがした。

「うわあ、随分涼しくなってきたね」

準備室の隅で、ホルマリン漬けの解剖されたカエルが入った瓶を愛おしそうに拭く水谷麻衣子は、感情の籠らない声でぼつりと呟いた。

「もう九月だもん。じめじめむしむしの夏ともおさらばよ。今月末には夏服ともおさらばになるのかな」

奈々瀬の言葉にこくりと頷いた麻衣子は、縁なし眼鏡の奥にある眠たげな眼で夕焼け空を眺めている。彼女のショートヘアがふわりと秋風に揺れていた。

三年の彼女達が夏制服を着るのはこの夏が最後。このまま涼しくなると、もう二度と紙町女子の夏制服に袖を通す事はなくなってしまうのだ。そう考えると奈々瀬は少し名残惜しいような気がした。

奈々瀬と紗季の熱戦で、じつとりとむせ返っていた準備室に新鮮な空気が柔らかく入り込んでくる。五人は久しぶりに新鮮な地上の空気を味わうモグラのように、揃って大きく深呼吸をした。

「高校生活最後の夏も終わっちゃったんだね」  
麻衣子が薬瓶の整理をしながら淡泊に呟く。彼女の無感情な声でそう言われると余計に寂しい気がする。

「夏が終わったって事は、ここからは受験勉強漬けの毎日になるのかな」

紗季の言葉に奈々瀬は「げっ」と声を漏らして苦い顔になった。勉強など、夏休みは宿題を形だけ片付けたぐらいで、他には全くと言って良い程やっていなかった。受験勉強という言葉を聞くと胸が苦しくなる。

「アルマは良いよね、推薦で大学決まってるし」  
すると困った顔でアルマは微笑む。ビスクドールのような彼女の白い肌は窓から差し込む夕日に照らされて紅く染まっていた。奈々瀬の言葉には肯定も否定もしないで、アルマは聞き返してきた。

「紗季と奈々瀬はやっぱり国立大なの？」  
まあ私はね、と紗季は答えた。奈々瀬も身を乗り出して慌てたように、そうそう私も国立だよ、と続ける。あまり勉強していないの

で胸を張って言えない。

もう九月。高校生活も残す所あと僅かだ。

他府県の大学の薬学部への推薦が決まっているアルマ。大学へは行かずに爬虫類ペットショップでバイトしようかな、などと言っている麻衣子。一方で特進クラスの奈々瀬と紗季は国立大学への進学を期待されている。そしてマイペース過ぎるくるみはまだ具体的な志望校すら曖昧模様な状態だった。

進路が決まっている者、決まっていない者それぞれだが、半年後には科学部の五人もそれぞれの道に進んでしまう。一年で科学部に入部した時から、楽しい事も辛い事も分かち合っ一緒に馬鹿をやってきた仲間とも、もう直ぐ離ればなれになってしまうのだ。

いつかはその時が来ると分かっていたのだが、いざその時が近づいてくると気持ちが落ちてしまう。

いつまでも高校生のまま、馬鹿なゲームばかりやっていられたらどれだけ楽しい人生なんだろうと、科学部の五人は思っていた。

そう、馬鹿なゲームを。

「暗くなるのも早くなつたなあ。よし、五時半までには片付けちゃおう。それからみんなで駅前のカフェでお茶しようか」

紗季が提案すると、他の四人も「賛成！」と声を揃えた。

カフェという目標が出来て彼女達の作業速度が増す。後でお茶するという事が決まっているにもかかわらず、くるみはペットボトルのウーロン茶をがぶ飲みしている。そんなに水分を取っていると、美味しい紅茶の味が分からなくなろうと思っただが、重い荷物を運んだり体を動かしたので喉が渴いたのだろう。喉を鳴らしてウーロン茶を飲むくみの姿を見ていると、こちらまで喉が渴いてくる。

奈々瀬は薬品棚の整理に取り掛かった。

茶色い瓶にはいずれもラベルが貼られている。塩化ナトリウムやエタノールなど授業でもよく使用するものから、いつ使用するのかも分からないような薬品まで、恐らく百以上の薬品が棚の中に並んでいる。

その中の一つを手に取り、目を細めてラベルを見る。

「ねえ、 ヒドロキシプロピオン酸って何？」

「何それ、そんなの三年間で一度も使った事ないよね」とくるみ。使わなそうなら捨てちゃえば、と言った紗季はこちらに目もくれずモツプ掛けをしている。そうだね、と下顎を突き出して同調した奈々瀬は薬品瓶の蓋を開けた。

中には白い粉末が入っていた。

シンプルな瓶、シンプルなラベル。茶色い薬品瓶に入った粉末は不思議な魔力を帯びているように、奈々瀬の知的好奇心を掻きたてる。もしかして危険な薬品なのだろうか。しかし液体ではないし、少しくらい触ってみても大丈夫だろうと、奈々瀬はそろりと瓶の中に指を伸ばした。

「何してるの奈々瀬！」

空気を切り裂くような叫びに奈々瀬はびっくりと引き攣った。

その場の全員が作業の手を止めて奈々瀬に注目する。声を上げたのはアルマだった。彼女は真っ青な顔をして奈々瀬を見ている。そしてその震えた口唇を動かして、震えた声を発した。

「今… ヒドロキシプロピオン酸を触ったの？」

「え、ちよつと触ってみただけど…どうしたの？」

奈々瀬がそう答えるとアルマは両手で口元を覆って大きく目を見開く。

まずかったのだろうか。取り乱すアルマを見て奈々瀬にも不安が伝染する。え、何なの何なの、と奈々瀬は狼狽していた。

するとアルマが一言だけ口にする。

劇薬よ、と。

「ちよつと待ってよ、これってもしかして猛毒なの？」

奈々瀬は慌てて瓶の蓋を閉めて机の上に置いた。その近くにいたくるみも逃げるように瓶から離れた。

「でもちよつと触ったくらいだよ。飲んでもいないし、目にも入ってないから大丈夫だよ、ね？」

奈々瀬が一步進むと、アルマは距離を置くように後ずさった。同じように他の三人も奈々瀬から一步離れる。

…何なのよ。

皆はまるで化け物を見るような目で奈々瀬を見ている。奈々瀬の胸の中で、上手く表現出来ない灰色の不安がふつふつと泡立ち出した。するとアルマが何度か深呼吸して息を整えてから口を開く。

「奈々瀬、落ち着いて聞いてね。ヒドロキシプロピオン酸は経皮でも危険なの。しかも指先でしょ。爪の間から毒素が侵入して、やがてそれが全身に回って、嘔吐や目まいの症状が表れるの。それから、最悪の場合…」

そこまで言ってアルマは口籠った。

「もしかして、私…死ぬの？」

アルマは目を伏せるように頷く。

死。その言葉が脳裏を過った奈々瀬は、弾かれたように流し台に駆けて蛇口を捻る。勢い良く出る水に、薬品の付いた指を晒して「しごとと血が滲むほど擦った。

死にたくない。まだ死にたくない。

「ねえ、奈々瀬」

不意に名前を呼ばれて振り返ると、麻衣子が例の劇薬の瓶を持っていた。人差し指で眼鏡のブリッジを押し上げた彼女はおもむろに薬品瓶を開けた。彼女が瓶の口をこちらに傾けると中の白い粉末が見える。

すると麻衣子は瓶の中に手を入れた。

「ちよつと麻衣子、何してるの！」

奈々瀬が叫ぶと麻衣子は僅かに口元を綻ばせた。彼女が何を考えているのか全く分からない。麻衣子は更に驚くべき行動をとる。

粉末をつまみ上げ、それを自らの舌の上に乗せた。

「ま、麻衣子…」

奈々瀬は目を丸くして絶句した。驚愕する彼女の目を見たまま、麻衣子は長い舌を口の中に戻してあの白い粉末を味わうように口を

動かしている。

「全く、アルマも意地悪だよ」

麻衣子がアルマの方へ目配せする。すると彼女は柔らかかそうな栗色の髪を揺らして、くすくすと笑っている。

…え、何？

「これは猛毒でも何でもないの。       ヒドロキシプロピオン酸って  
ただの乳酸だよ」

「乳酸…」

そう乳酸、と言って頷く麻衣子。

「知ってるでしょ、筋肉疲労の原因物質って言われてたやつ。食品  
添加物として使われているから口に入っても死なないよ」

「そうだったの！   という事は…」

ちらりとアルマの方を睨むと、彼女はピースサインをこちらに向けていた。どうやら彼女に一本取られたようだ。

「それにしても奈々瀬の焦り方…面白かったなあ」

普段は無表情な麻衣子が愉快そうに声を出して笑う。

滅多に感情を表に出さない彼女の笑いの琴線は人の恥ずかしい姿らしい。あまり褒められた趣味ではない。その横でアルマも口元を押さえて肩を震わせながら笑っていた。

「ちよつと、こっちは本当に死ぬかと思っただからね！」

笑われて悔しくなった奈々瀬がアルマと麻衣子に突っかかって行くこうとする。すると間に入って来た紗季が「はいはい、さっさと掃除終わらせちゃおう」と奈々瀬の背中をぼんぼん叩いて薬品棚へ促す。

机に置いてあった瓶を手にとって憎々しげに睨む。ちくしょう、  
アンタの所為で恥かいたじゃないの。奈々瀬は薬品瓶に心の中で文句を言ってから薬品棚に戻した。

固体、液体別に五十音順に薬品を並べ終わった。こうして並べると改めてまだまだ知らない薬品が多かった事に気付く。特に奈々瀬の視線の高さから外れていて、普段なかなか目にしない一番上の段

に見覚えのない薬品が多い。

…何だ、あれ。

一番上の棚の奥、炭酸カルシウムの薬品瓶の後ろに何か挟まっている。紙切れだろうか。奈々瀬は背伸びをして棚の奥に手を伸ばす。ほぼ手探り状態で瓶を倒さないように慎重にさつき見た紙を探す。

…あ、あった。

奈々瀬がその紙を引き抜くと埃も一緒に落ちてきた。咳払いをしながら肩に掛かった埃を払っていると、隣の書棚の整理をしていたくるみがやってきた。

「どうしたの、何その汚い紙？」

彼女はペットボトルに口を付けたまま質問する。奈々瀬の手にあるのは折り置まれたノートの切れ端だった。よくあるキャンパスノートなのだが、相当古い物らしく全体的に変色しているし端もぼろぼろに朽ちかけて柔らかくなっていてる。

「ああ、何か棚の奥に挟まってたんだけどね。何だろう」

「もしかしてラブレターとかかな？」

何故かほんのり頬を赤らめているくるみ。見ちゃおうよ、と奈々瀬に寄って来る。

「何言ってるのよ。女子高でラブレターなんか落ちてる訳じゃないでしょ」

「いやいや分かんないよ。別の学校の男の子から貰ったのかもしれないし。あ、ウチの学校生徒は女子しかないけど…もしかして生徒と教師の禁断の愛とか？ それか女同士の、もっと禁断の愛かなあ？」

くるみは自分で言うておいて興奮したのか、またウーロン茶をがぶ飲みする。二リットルのペットボトルが空になってしまいそうだ。そんな大量の水分がこの小さな身体の、いったいどこに入っているのだろうか。

「ホント想像力が豊かな事。くるみは恋愛小説でも書いてみたらど

う？ それだけ空想妄想が働くなら面白いのが出来るんじゃないかな」

まさか本当にラブレターな訳がないだろう。

それでも奈々瀬の頭には「もしかしたら」という事が植え付けられていて、ラブレターではないにしろ、ゴシップの類のものを少し期待してしまっていた。

奈々瀬は豊んである紙切れを開く。

…何なの、これ。

その中を見た瞬間、彼女の頭に電流が走った。それはラブレター以上に刺激的な内容だった。

ねえ何なの？ と背伸びしたくるみが手元を覗き込んでくる。すると他の三人も奈々瀬達の様子に気づいたようだ。

「ちよつと、みんな見てよ。何か面白い事書いてあるよ」

奈々瀬は草臥くたひれた紙を机の上に広げた。五人はノートの切れ端を取り囲むようにして、机の周りに集まった。しわしわの黄ばんだ紙を丁寧に手で伸ばす奈々瀬。力加減を間違うと破れてしまうどころか風化してしまいそうだ。

「科学部サバイバルゲーム？」

首を伸ばして目を細める紗季が一行目の文字列を口にした。

「今まで私達がやってた遊びより面白そうじゃない？」

それぞれの顔を奈々瀬が見回すと、四人は真剣に文字を追いながらもこくりこくりと首肯している。

そこに記されてあったのはサバイバルゲームのルール表。雑な箇条書きで表されているだけだが、シンプルでいて面白味があつて彼女達の心を掴むには十分だった。

#### 科学部サバイバルゲーム

？ 日常生活中、参加者同士で毒を仕掛ける（ワサビでもタバスコでも何でも可）。

？ 自ら降参を表明しない限り何度でも復帰できる。

? 一度降参した者への攻撃は禁止する。

? 参加者以外への攻撃は厳禁とする。

? 開始から三ヶ月を経つても参加者が二人以上残っている場合は引き分けとする。

? 万が一のため、参加の際に「自殺」という旨の遺書を直筆で用意する。

「へえ、さっきみたいにわざわざ場を設けずに、常に勝負が続いてるって事か。私達が今までやってたのと全然違うじゃん」

紗季はその紙切れを手に取って興味深そうに頷きながら眺めている。

彼女の言うとおり、このルールならロシアンルーレット方式にしないで良い。期間中ならいつでもどこでも勝負ができる。

裏を返せば家でも学校でも二十四時間気を抜けないという事になる。

「じゃあ、スタートから三ヶ月の間なら、予告なしで食べ物に変な物を入れても良いって事だね。例えば後でこっそり誰かさんのペットボトルに辛子を入れるとか」

丸椅子に座って頬杖をつく麻衣子はくるみを見て薄く笑う。ぴくりと反応したくるみはウーロン茶の蓋を固く閉ざして背中に隠した。それにしても…。と、顎に人差し指を置いて難しそうな顔をするアルマは、紗季の持つ紙切れを覗き込んでいる。

「随分古い紙だけど、これって誰が書いたんだろうね」

「さあ。でもタイトルで『科学部』って書いてあるし、きっと昔の科学部の先輩なんだろうね。私と紗季がやってたタバスコロシアンルーレットにしても、去年の先輩がやってたんだし」

先人の知恵、とでも言うべきだろうか。

くじ引きのようなゲームばかりしていた彼女達にとって、この発想は目から鱗だった。とてもではないがこのサバイバルゲーム方式のルールは思いつかなかっただろう。

紙町女子の科学部は昔からこんな遊びばかりしていたのかと思うと、奈々瀬は会った事もない先輩達にどことなく親近感を覚えた。くるみが何か言いたそうな顔で口をぱくぱくさせている。どうしたの、と奈々瀬が尋ねると彼女は「ここ」と言っつて？を指差した。「遺書つて、何で要るんだろっ…ね」

それは全員が引つ掛かっていた事らしく、くるみの言葉に五人とも黙り込んだ。さらには「自殺」という物々しい言葉の存在感が、高校生同士の遊びにしてはあまりに大き過ぎる。奈々瀬は何も答えられない。

まさか、死者まで想定したゲームなのだろうか。

「雰囲気作りでしょ？」

アルマが軽い口調で答えた。彼女は続ける。

「やっぱりこういうゲームって入り込まなくちゃ感じが出ないでしょ。遺書を書くって事はゲームに参加するって意思表示と儀式の意味があるんじゃないかな」

彼女の言うとおりで。部活メンバー同士の遊びが殺し合いに発展するなどあり得る筈がない。それでも遺書を書くという行為自体が不思議なりアリティを生み、よりゲームへのめり込むことが出来るきっかけとなる。

アルマの言葉を借りると、まさしく儀式だ。

「ちょっと、麻衣子…何してるの？」

麻衣子は机の上にノートを出してボールペンで何やら書き始めていた。ふと手を止めて奈々瀬の顔を見上げる。

「何って、遺書書いてるの。みんなもやるでしょ、科学部サバイバルゲーム」

眼鏡の奥の虚ろな瞳は真剣そのものだ。どうやら冗談ではないらしい。

「よし、私も」

「紗季！」

麻衣子に後れを取るまいと紗季までノートを取り出して遺書を書

き始める。それに続いてアルマまで机の上にノートを開いた。三人は黙々と、架空の死の理由を考えて文字にしてゆく。

お父さんお母さんごめんなさい。もう生きてゆけません。全てが嫌になりました。辛いです。悲しいです。苦しいです。さようなら。

三人は思い思いの文面を綴ってゆく。後ろ向きで絶望的な言葉を書いているにもかかわらず、その顔は妙に生き生きしていて気味が悪かった。

… 毒を仕掛けるサバイバルゲーム、か。

… アブナイ遊びだなあ。

奈々瀬は三人の様子を窺いながら迷っていた。仲の良い科学部メンバーの全員が敵になり、どこからともなく自分に毒牙を向けてくる。ゲームが始まれば、今の自分達の関係が崩れてしまつかもしれない。

良くない事だ。そう思いながらも奈々瀬の手が疼く。目の前に極上のスリルがぶら下がっているのだ。

… まあ、ちよつとぐらい。

奈々瀬は鞆から英文法のノートを取り出して一枚千切り、机の上に置く。

「私が一番になるから、よろしく」

「やつぱり乗ってきた。奈々瀬にはさっきの借りを返さなきゃね」と紗季。

あつ、と隣でくるみが声を漏らしたと同時に、先に遺書を書き始めていた三人が奈々瀬の方を見て微笑んだ。

「仲間外れは嫌だよ！」

全員参加するような空気に炙り出されたように、くるみも鞆からノートを取り出して机の上に力強く置いた。

科学部三年の全員がサバイバルゲームに参加する事になった。

… ちよつくら、やってみようかな。アレの練習だと思って。

… そう。これは練習。

かりかりと鉛筆の音だけが響いていた時、紗季が口を開いた。  
「思ったんだけどさ、科学部サバイバルゲームって名前ダサくない？」

確かにヒネリがないよね、とアルマもそれに同調した。くるみと麻衣子は別に気にしていない様子だったが、紗季とアルマは「何か他に良い名前はないのか」という目で奈々瀬に催促してくる。

「奈々瀬、何か思いつかない？」

何で私に振るの、と思いつながらも奈々瀬は腕を組んで考えていた。

∴ 毒を仕掛け合う科学部の私達、でしょ？

最近の流行語で、インドア派の女性を家ガールと言ったりアウトドア派の女性を山ガールと言ったりするのを思い出した。そして今、英文法のノートの切れ端を使っていた事から一つ思いついた。

奈々瀬は書き慣れた筆記体でノートにペンを走らせる。

P o i s o n   G i r l

## 正義から悪へ

何とか戦隊、何とかレンジャー。

名前などすっかり忘れてしまったが、幼い頃の悟は戦隊物ヒーローが大好きだった。確か金曜日の夕方に放送されていたような気がする。

幼稚園から帰ってきて手洗いうがいを済ませるなり大急ぎでテレビを点けた。幼い悟は番組が始まる十分以上も前からテレビの前で正座して待っていた。その姿を見た母親は呆れたように笑っていたが悟自身は真剣そのものだ。ブラウン管の中のヒーローの活躍を応援する事が悟の一週間の中で最も大切な時間だった。

街に現れた悪の怪人と五人のヒーローが戦い、最後には巨大化した怪人を合体ロボに乗ったヒーロー達が力を合わせて打ち倒す。毎週そのパターンの繰り返しだった。

強きを挫き、弱きを助ける。そして正義は必ず勝つ。

ありきたりな展開だが、そのヒーロー達は幼い悟に正義のなんたるかを教えてくれた。悟にとってまさに正義の教典だった。

おかげで彼は意味もよく分からないのに「正義」という言葉が好きになり、「正義」に憧れるようになった。正義とは良い事、そして強くて正しい事。それが幼い彼なりの正義の認識だった。

世界を征服しようとしている怪人は見紛う事なき完全な悪。それと戦う五人のヒーローは疑う余地のない純潔で完璧な正義。完全なる勧善懲悪の構図がブラウン管の中にはあった。

そして幼い悟は思った。

世界の全ては正義と悪で出来ているのだろう、と。

警察が正義の味方で、警察に捕まる人が悪者。世界中で起こっている戦争も正義の国と悪の国が戦っていると思っていた。悟の中には白と黒しか存在しなかった。

そして幼い悟は思った。

僕は正義の味方になりたい、と。

迫りくる悪を倒し、困っている弱い人達を守りたい。その為に少しでも強くなりたいと願って、ヒーロー達の活躍を毎週食い入るように観ていた。正義のヒーローはいつも孤独だった。正義の味方はたった五人しかいない、しかし悪の怪人は大勢の戦闘員を連れて来る。リーダー格の怪人を倒しても、次の週にはまた別の怪人が現れる。倒しても倒してもきりが無い。悪の怪人が現れ続ける限りヒーローは戦い続けなければならない。

そして幼い悟は思った。

この世界には悪が多過ぎる、と。

いくら正義のヒーローが強くても、たった五人しかいないのでは世界中の悪を懲らしめる事は出来ない。悪者の数だけ、いやその何倍もの人が悪者に苦しめられている。そう思うと悟は自分が何もできない事を歯痒く思った。

そして幼い悟は思った。

心の底から悪が憎い、と。

悟は運転席に座るなりクーラーをつけた。

真夏日のピークは越えたらしく、日が沈んでからは少し涼しくなってくる。しかし日中は車内でもエアコンをつけていなければ汗が噴き出るほどの暑さだ。夏の名残はまだまだある。

助手席に鞆とサマージャケットを投げ置いてネクタイを緩める。

煙草をくわえてアクセルを踏み、陽炎の揺らめくアスファルトの上を走り出した。

…今日はあと二件回ったら終わりだな。

赤信号で手帳を確認して今日回る営業先を確認する。予定通り順調にいくと今日は七時には家に帰れそうだ。煙草の火を消して窓を開けて換気をする、外から熱気が入り込んできて悟の背中に汗が滲む。

しばらくして窓を閉めると煙草の匂いはある程度消えたが、染み

ついた薬品の鼻を衝く臭いは消えなかった。

悟は、企業相手の医薬品の営業をしている。オフィスの薬箱の中身の補充のルート営業だ。彼は毎日同じ時間に起き、同じ道を運転して、同じ営業先を回って、同じように頭を下げるという判で押しただような生活を送っていた。

そんな生活が退屈だと思う人もいるかもしれないが、野心もなく刺激を求める事もない悟には全く苦でなかった。

煙草も二十歳になってから吸い始めたし、酒も付き合いでしか飲まない。ギャンブルなど、もっての外だった。真面目が服を着て歩いているような彼の事を退屈で面白味のない人間だと評価する人間も少なくない。しかし大きな喜びはないが、深い悲しみもない穏やかな毎日が悟は好きだった。

こうして人生がのんびり過ぎていけば良いのに。

悟はそう思っていた。

やがて海が見えてきた。太陽の光を反射させてきらきらと光る波の眩しさに悟は目を細める。カモメかウミネコか知らないが、灯台のすぐ傍の水面の上で群れを成している。その下に魚が沢山いるのだろうか。

臨海都市部のオフィス街を車で走るのは気持ちが良い。ふと外の空気が吸いたくなって窓を開けると海鳥の鳴き声と一緒に潮風が吹き込んでくる。そう言えば今年も海水浴に行かなかったな、などと考えながら彼は胸一杯に潮風を吸い込んだ。

気分が良くなってスピードが上がっていたらしい。スピードメーターを見て法定速度を少し超えていた事に気が付くと、悟は静かにアクセルを緩めた。

海に面したビル、七階のオフィスに注文されていた薬を持っていく。その窓からも眩しい海が見えた。こんな所で働いたら良いなとは思わなかった。良い眺めだとは感じるが現状に満足している悟に欲はなく、いつも通りフロントで解熱剤と頭痛薬を三箱ずつ置いて領収書を切ってビルを後にする。

手の届く幸せがあればそれで良かった。

大型ドラッグストアで缶コーヒーを買って喉を潤す。医薬品の販売営業をしながらドラッグストアに立ち寄るのは何か変な気分だったが、いつもの事なので気にならなくなっていた。国道沿いにある上に駐車場が広くて車を止めやすいのでちょうど良い。

エアコンの効いた車内で冷たい微糖のコーヒーを飲みながらのんびりと休憩していた。煙草は一日五本までと決めているので、後は仕事が終わるまで吸わない。いつも通り、ここの駐車場でダッシュボードに置いていた携帯電話を確認する。

このメールを見てるって事は休憩中かな？ 残りのお仕事頑張つて！

恋人の香那からのメールだった。

いつもこのタイミングでメールチェックをすると香那からのメールが入っている。彼女も悟の生活リズムを把握しているらしく、今の状況をぴたりと言い当ててくる。それが嬉しく思えた。営業マンの顔になっていた悟も、つい表情を緩めてしまう。それもいつも通りの事だった。

いつも通り仕事を続けられていて、いつも通り香那からメールが届く。

いつも通り…。

それが悟の幸せだった。

昨夜、その幸せは血塗れちまみの危機に晒された。しかしその翌日も悟と香那のいつも通りは穏やかな小川の流れのように変わらずに続いている。

悟は幸せを守れたのだった。

陽は随分傾いていた。

昼の時間もだんだん短くなっているらしい。

最後の営業先に着いたのは夕方六時を回っていた。大きなオフィス街にある小さなビルの小さな事務所。何台かの事務机に何台かの

パソコンが並んでいる。商社を営んでいるらしいが、どんな仕事をしているのかまで悟は知らない。

受付で声を掛けると、いつも通り人の良さそうな中年男性が出てくる。縁なし眼鏡を掛け、草臥れたワイシャツを着ている白髪混じりの男性は、典型的な「おじさん」と呼ばれる人種だ。確か山崎さんという名前だった。

「ああ、笹中さん。いつもありがとうね」

「いえいえ。こちらこそいつもありがとうございます」

悟は愛想の良い笑顔を見せて頭を下げる。

「ええと、今日は湿布が三ケースと胃薬が一箱でしたね」

悟が持参した薬箱を開くと、つんと鼻を衝く臭いが漂う。薬品の匂いにもすっかり慣れてしまった。

注文の薬を山崎さんが持って来た薬箱に詰めてゆき、ついでに他の薬の使用期限も確認する。齢を取った社員が多い所為か、悟が回っている他のオフィスよりも薬の消費量が多いような気がした。

薬を詰め終わると今度は山崎さんが深々と礼をした。

仕事ですからお気になさらず、とは言えなかった。色々なオフィスを回っていれば色々な人がいる。山崎さんのような人もいるが、中には悟のような営業マンをぞんざいに扱う人もいる。悟は、気さくで礼儀正しい山崎さんがどことなく好きだった。

「ところで笹中さんは車で通勤してるのかい？」

話好きの山崎さんはいつも何かと話しかけてくる。若い人と話す機会が少ないので、悟の事を珍しく思い興味を持っているのかもしれない。

「はい。営業は社用車で回っていますけど、いつも会社までは自分の車で通勤していますよ」

悟も領収書を切りながら答える。

「事故には気を付けなよ。先月すぐその工場の近くでも事故あったの知らない？」

「先月ですか」

領収書を受け取った山崎さんは小さく頷いた。

「そうそう、交通事故があったんだよ。しかも轢き逃げらしくてね、轢いた方はまだ見つかってないらしいよ。逃げたっていつかは警察に捕まるのに：全く悪い奴もいるもんだねえ」

：先月の交通事故、轢き逃げ。

悟は冷静を取り繕いながら薬箱を整理している。今自分がどんな表情をしているのかと心配になった。

「まあ、笹中さんは真面目な人だから轢き逃げなんてしないだろうけど、くれぐれも安全運転でね」

そう言って山崎さんは目じりにしわを寄せて笑った。

「ええ、気を付けます。ありがとうございます」

悟は愛想の良い顔で頭を下げた。

少し胸が痛んだ。

全ての営業を終えて営業所に戻る頃には暗くなっていた。

デスクに座って今日販売した薬の書類をまとめてから「お疲れ様でした」と残っている社員に一声掛けてから営業所を後にした。

社員同士の関わりは極めて希薄だ。

しかし人付き合いがそれ程得意ではない悟にとってそれぐらいがちょうど良かった。決して彼の務めている会社が人間関係の悪い職場という訳ではない。ただ悟が必要以上の関わりを避けているだけだった。

職場で悟が嫌われている訳でもない。営業成績も良く、何でも器用にこなす彼の評価は社内でも低くはない。愛想も良く上司からも気に入られているし、同僚や後輩からも頼りにされている。

ただ、付き合いは悪い。仕事が終わってから同僚や上司に飲みに行こうと誘われても何かと理由をつけて断ってきた。いつも通りが崩れる予定を入れるのが堪らなく厭だったからだ。

イレギュラーな誘いはすべて断ってきたが、前もって予定されている社内の飲み会には参加している。それでも飲みすぎる事なく、

かと言って飲まない訳でもなく、無難に制御して飲んでいた。

今日はちよつと…。この後予定が…。言葉を上手く濁しながら飲みの誘いを断っている内に、誰も悟を誘わなくなっていた。

それで良かった。

いつも通りを守れるのなら、それで良かった。

目立たず、嫌われず、好かれず。誰も目に留めないアスファルトの隙間に生える植物のような穏やかで静かな生活が好きだった。

誰よりも幸せになりたい。

そんな事は一度たりとも思った事がない。

仕事をして、いつか結婚して、子供を育てて、齢をとつて。そして安らかにベッドの上で人生の幕を下ろす。

そんな普通の人生が彼の幸せだった。

会社が契約している月極の駐車場に停めてある自家用車に乗った悟はネクタイを外して助手席に置いた。

エンジンをかけた時、デジタル時計には七時と表示されていた。

いつもより少し遅い時間で、悟は少し不愉快な気分になる。胸ポケットから携帯電話を取り出して「ちよつと遅くなっただけど今仕事が終わったよ」と香那にメールを送ってからアクセルを踏んでゆつくりと車を走らせ始める。

ラジオをつけるとニュースが流れていた。どうやら総理大臣が交代するらしく、新しい首相の名前が告げられている。

「おいおい、また代わるのか」

独り言でラジオに話しかける悟。

そうは言っても政治にはあまり関心がない。どうせ名前を憶えても、どうせまたすぐに交代するのだらうとつんざりしていた。半年ごとに総理大臣が代わったりする変化の激しい政界に、悟はどうもついてゆけない。

変わらないのが一番良い。心の中でそう呟いた。

窓を開けると昼間とは違って変わって涼しい風が入り込んできた。もう夏が終わるのだと実感できる。淡い紺色の空を見上げると、こ

の前と少し形の変わった月が雲の間から顔を出していた。

暗くなってきた所為で、行き交う通行人の姿も随分見えにくくなってきた。部活帰りの高校生の自転車が高車道にはみ出して走っていて危ない。

くれぐれも安全運転でね。

山崎さんの言葉を思い出して、悟はスピードを落とした。

その時、ふと耳障りなエンジンをふかさ音が後方から聞こえた。そして一台の原付が凄いスピードで悟を追い越して行った。

悟の眉間にしわが寄る。

後続車を挑発するように蛇行する原付に二人乗りをした少年達。

彼らはヘルメットも被らず品のない茶色い頭を見せていた。さらに後ろに乗っている少年が火の点いたままの煙草を道路に投げ捨てる存在悪。

そんな言葉が悟の頭に浮かんだ。

別に悟は警察官でも裁判官でもなんでもない。それでも悪という存在が嫌いだ。知性もない、モラルもない醜い悪。見ていると嫌悪感を覚える。

「ゴミめ。さっさと死ねよ」

思わずそんな事を呟いた。

総理大臣が交代するよりも、法律が改正されるよりも、そんな人間が同じ社会にのうのうと生きている事の方が悟にとって大問題だった。

クラクションを鳴らされる少年達は、下品で間の抜けたエンジン音と共に次々と車を追い越して行く。

悟は彼らの後姿を睨みつけていた。

街のいたる所、どこにでも不良はいる。それも必ず群れで行動している。彼らがコンビ二の前でたむろしている姿をただで苛々する。

害虫駆除だ。

ふと、そんな言葉を思い出した。

大学の空手部時代、悟と同じような考えを持っている仲間がいた。ある日、部員五名で「町の掃除」という名目の下、不良狩りを行う事になった。不良が嫌いな悟は興味本位で不良狩りに着いて行く事にした。悟達は皆、体も大きく胸板も厚い。中には有段者も混じっている。

今から悪の巣窟に乗り込んで悪者を一扫する。自分達は悪の怪人と戦う正義の戦隊ヒーローだ。不意に子供の頃の淡い記憶が蘇った悟は少し胸が躍った。悟は何度も手を閉じたり開いたりして拳の感覚を確かめた。

深夜のコンビニへ行くと案の定、駐車場で不良が三人たむろしていた。

この人種はまるで灯りに集まる蛾のように夜のコンビニで群がる習性があるらしい。しかし蛾と違って食べかすや吸殻を散らかす分さらに始末が悪い。その姿を見た瞬間から、悟の胸の中は濁った泥水で溢れ返るようになっていた。

ここで害虫共に正義の鉄槌を下すのかと思った。

しかし、そんな綺麗なものではなかった。

空手部仲間の一人が雑貨屋で売っているようなニット製の覆面を被った。覆面と言っても何とかレンジャーや何とかライダーのようなヒーローの物とは程遠い。どちらかと言うと泥棒やテロリストのような悪者が被っている物だ。すると他の仲間も彼に続いて顔を隠す。悟にも覆面を手渡された。

これから社会の為になる良い事をするのになぜ顔を隠す必要があるのだろうか。そう思っていると、仲間の一人が座り込んでいる不良達に向かって駆け出して、その中の一人の顔面に思い切り跳び蹴りを入れた。

アスファルトの上に倒れ込んだ不良は鼻と口から血を噴き出して立っている。前歯も何本か無くなっていた。他の二人が何かを喚いて立ち上がるうとしたとき、こちらの仲間がその二人に不意打ちを仕掛け

る。残った不良の一人は腹を蹴られ、もう一人は髪を掴まれて顔を殴られていた。

「害虫駆除だ」

誰かがそう言った。

そこからはまさしく袋叩きだった。

逃げようとバイクに向かって這う不良の頭を踏みつけて、顔面をアスファルトに押し付ける。一人が羽交い絞めにしてもう一人がサンドバッグを叩くように腹を殴る。頭を抱えて丸くなった不良をサッカーボールのように蹴る。

冷たいアスファルトに転がる不良達の事を、誰ももう人間とは思っていない。不良達は日頃の鬱憤を晴らす為のおもちゃになっていた。

悟はその様子を見詰めてただ立ち尽くしていた。

憎々しく思っていた不良も、よく見ればまだ高校生ぐらいの年の頃で、自分達よりも年下だ。そんな彼らが泣きながら「勘弁して下さい」と許しを乞うている。それでも悟の仲間達は聞く耳を持たず少年達を殴り、蹴り、暴行を続けている。

以前、悟の知人の誰かが「不良は健康保険証を持っていないようなもの」と言っていたのを思い出した。普段は反社会的に傲慢に振る舞っているが、いざと言うとき何の保護もなく誰も守ってはくれない。

その通りだと思う。

彼らを助けられる者はいない。当たり前の事だろう。彼らは悪だ。正義の味方に倒されるべき悪者を助ける神様などいない。

悪い不良に制裁を下している自分達は正義だ。世間に迷惑をかけるのが悪で、それを誅するのが正義だ。その筈だ。

正義の対義語は悪。幼い頃からずっとそう思っ生きてきた。

しかし目の前の光景を見ると自分の考えが正しいのか少し疑ってしまった。辺りには飛び散った血や折れた歯が転がっている。

悟の仲間は無抵抗の少年達を殴って蹴って引き摺り回す。覆面に隠

されたその顔は、きつと笑っているのだろう。

これは正義の鉄槌などではない。ただの暴力だ。悟の目の前に正義の味方は一人もいなかった。

悪だ。

どつちも、悪だ。

もう悟は何が正義で、何が悪か分からなくなった。真の悪を見極める目を手に入れるしかない。そう考えた。

それ以来、悟が「町の掃除」に参加する事はなかった。

仲間達が空手部の打ち上げなどの酒の席で、不良狩りの事を自慢げに後輩に語っている場面も時々目にした。粗野な身振り手振りを交えてその時の状況をわざわざ再現する同輩にも眉をしかめたが、その話に目を輝かせている後輩にも嫌悪を覚えた。

悪だ。

正義の味方に憧れて、強くなる為に幼い頃から武道を続けている。しかし正義を求めて門を叩いた空手部の中にも微細な悪が混じっていた。悟が求めているものは絶対的で完全な正義。汚れのない純白。幼い頃に見た、ブラウン管の向こうで戦っていたヒーロー達のような真の正義。

偽物などいらぬ。

いつのまにか完全な夜になっていた。

都市部から離れるほど車の数も疎らになり、気が付けば悟の前には一台の車も走っていないかった。赤信号で止まっても後続車は来ない。

静かな夜だった。

この後、家に帰って風呂に入って夕食をとる。それから香那と電話で喋ってから煙草を一本だけ吸ってベッドで眠る。それが悟のいつも通りだ。

眠りに就く前に香那の声を聴くのは本当に気持ちが悪く落ち着く。電話越しでも透明で癖のない澄んだ声。彼女の声には悪の色が全くな

い。街に出ると下品で私の強い女性も少なくないが香那は全く違う。毎晩何気ない事を香那と話してから眠り、毎朝同じ時間に起きて仕事へ行く。そして同じ時間に帰ってきて電話越しに香那の声を聴いてから眠る。

この単調で穏やかなサイクルが死ぬまで続くのだと悟は思っている。

悟のマンションまでおよそあと十五分。

胸ポケットから煙草を取り出して火を点ける。箱の中にはあと一本だけ残っていた。一日五本、まるで医者から処方された薬のように決まった時間にだけ吸うので、いつも悟の煙草はちょうど四日でなくなる。今日がその四日目だった。

窓を開けて換気をする、冷たい夜の空気が入って来る。秋の匂いがした。

ラジオからは爽やかなクラシック音楽をバックミュージックにした天気予報が流れている。明日の降水確率は〇パーセントで一日中晴れが続くらしい。明日もいつも通り晴れらしい。

天気予報が終わり、アナウンサーの声が神秘的なトーンに変わった。この声の調子からすると、小学生の福祉活動の様子や動物園のパンダの話題などではないだろう。

何があったのだろうか、悟は耳をそばだてた。

昨夜、市の高架下で男性が仰向けに倒れているのが発見されました。

同日午後十時頃、付近に住む女性から「若い男同士が喧嘩をしている」との通報があり、警察が駆けつけたところ、同市在住の鮫島翔平さん（二十九）が頭から血を流して倒れていました。

警察によりますと、鮫島さんは近くにあった鈍器で何度も頭を殴られていたという事です。

鮫島さんは病院に搬送された後、間もなく死亡が確認されました。通報した女性は「もう一人の男が走って逃げていった」と証言し

ており、警察は殺人事件として逃げた男の行方を追っています。

悟の息が止まった。

… 鮫島。

ラジオから流れるその名前を聞いて悟は愕然とした。それはまさしく昨日悟と会った男、そして悟が正義の鉄槌を下した男の名前だった。

あの後、鮫島は死んだという。

… 僕が、殺したんだ。

悟の手がみるみる震えだし、今夜は随分涼しいというのに額から大量の汗が流れ始める。全て冷や汗だ。悟は車を路肩に停めて、ハンドルを握りしめたまま項垂れた。肌の表面が凍るように冷たいのに内側は焼けるように熱くなっている。

警察は殺人事件として逃げた男の行方を追っています。

逃げた男の行方を追っています。

追っています。

アナウンサーの言葉が悟の頭の中で何度も跳ね回る。

警察は正義の味方で、悪者を捕まえるのが仕事だ。そんな事は小さな子供でも知っている。だから警察が追うのは悪者だ。悪者は警察から逃げる。

… それなら、

… 僕は、悪なのか。

悟のいつも通りは、少しずつ崩れ始める。

煙草の灰がぼとりと落ちた。

夏川奈々瀬が麻衣子の家を訪れたのは六時前だった。

「遅いよー。言ってた時間より三十分も遅れてるじゃない」

先に着いていた小宮くるみは口唇を突き出して文句を言う。そし

て座卓の上にはお決まりのペットボトルが置いてあった。

「ごめんごめん。仕方ないでしょ、特進クラスは毎日七限まで授業があつて、場合によつちやその後に補習まであるんだから」

「あんまり遅いもんだからウーロン茶全部飲んじゃうところだったんだよ」

お茶は関係ないでしょ、と胸の中で呟いて苦笑する奈々瀬。彼女も鞆を置いてカーペットの上に腰を下ろした。

昨日始まったサバイバルゲーム、ポイズンガールはまだ大きな動きを見せていない。ただ科学部の五人は昨日と比べてどこかよそよそしくなつたような気がする。相手がどう出るか、お互い探り合つているような緊張感があつた。

「あれ、麻衣子は？」

「麻衣子なら台所。奈々瀬がさつき『もうすぐ着く』ってメールくれたときに、紅茶用意してくるつて言つてたよ」

随分気が利くのね、と言つて奈々瀬は胸元のボタンを一つ開けて手で扇ぐ。九月になつて少し涼しくなつたものの、ここまで走つて来たので汗ばんでしまつていた。

「飲む？」

くるみがいつものウーロン茶を差し出ししてくる。もう直ぐ紅茶が入るんだから我慢するよ、と言つて奈々瀬が断ると、彼女は差し出した手を引つ込めて自分でがぶ飲みした。くるみの喉の音がリズム良く聞こえる。

「それよりこの部屋で一人にされる身にもなつてよ。麻衣子は『可愛い可愛い』つて言つてるけど、流石にちよつとキツイつて」

くるみは膝を抱えて小さく丸まり、辺りをきよるきよると見回す。「確かに。麻衣子の趣味はちよつと強烈だからね」

奈々瀬の背後で物音がする。

部屋の中の気配に集中すると、物音がするのは背後だけではない。この部屋のいたる所から物音がする。

麻衣子の部屋には大きささまざまな水槽が所狭しと並んでいる。

彼女はその中の生き物達と共同生活を送っている。水槽と言っても飼っているのは金魚や熱帯魚ではない。金魚が入っている水槽もあると言えばあるのだが、決して金魚をメインとして育てているのではない。あくまでも金魚は他の住民の餌として生かされているだけだ。

カエル、カメ、トカゲ。

果ては一メートル近くあるへびまで。

多種多様な爬虫類が水槽の中で蠢うごめいている。毒々しい極彩色をしたカエルやとぐろを巻いたへびを目の前にすると小心者のくるみが怯えるのは勿論、それなりに胆きもの座った奈々瀬でさえ尻込みしてしまう。

一般的に忌避される事が多い動物だがこれが麻衣子の趣味で、彼女はホルマリン漬けのカエルの瓶に頬擦りするほど爬虫類を愛好しているのだ。

「流星は爬虫類レイイこと水谷麻衣子。強烈だわ」

蠢く黒い影たちに囲まれた奈々瀬は苦笑せざるを得ない。

しばらくしてドアが開く音が聞こえる。麻衣子が部屋に戻ってきた。

「いらつしゃい奈々瀬、遅かったじゃない。あまりに遅いもんだから、くるみがずつと文句言ってたんだよ」

いつも通りの抑揚のない声でそう言った。

まだ制服を着たままの彼女はポットと三つのカップを乗せた盆を両手で持っていた。麻衣子はテーブルに盆を置くと、機械のように全く無駄のない動きでカップを奈々瀬達の前に置いて紅茶を淹れる。仄かに甘いジャスミンの香りがした。

「それにしてもさ、麻衣子も女の子なんだからもつと可愛い物とか置かないの？」

最初に口を開いたのはくるみだ。彼女は小さな爬虫類動物園を見渡して苦い顔をしている。

「可愛い物って？」と麻衣子が返す。

「たとえばクマのぬいぐるみとかさあ、色々あるじゃん」

「ぬいぐるみじゃなくてもカエルとか可愛いじゃない。ぶくぶく顎の下膨らましてる姿とか癒されるよ」

麻衣子は奈々瀬の隣にある水槽に視線を向ける。

六十センチ規格の水槽の中から、紫色の身体に黒い斑点のあるカエルが虚ろな目をして奈々瀬を見ていた。対して奈々瀬も顔を顰めて極彩色のカエルを凝視する。

「何、このカラフルなカエル？」

「ああ、その子？ コバルトヤドクガエルって種類なの」

ヤドクガエル！ と驚いたくるみは座ったまま後ろに飛び退いた。彼女の反応を見た麻衣子は満足げに表情を緩める。一方の奈々瀬は興味深そうに水槽に顔を近付けていた。カエルと奈々瀬の顔は、ガラス越しにくつつきそうになっている。

「何かテレビで聞いた事あるよ、その種類。確か毒があるって……」

「そう。皮膚から分泌される体液にアルカロイド系の神経毒を持つ有毒生物。少量でも血管に入れば大人も死んじゃうの。南米産のカエルで、鏝やじりにその体液を塗って狩猟に使われてたからヤドクって名前が付いたんだよ」

麻衣子は何やら難しい事を言っているが、要するに危険な生物だという事らしい。ヤドクガエルがそうであるように、キノコにしても昆虫にしても、自然界で派手な色をしているものに毒があるという事は定説のようだ。

「そつだ毒で思い出したけど……。麻衣子はそつ口にして奈々瀬達に向き直った。」

「もう始めてる？」

「始めてるって、何の話？」

奈々瀬は首を傾げる。

「ポイズンガールだよ。今日で二日目だけど早速もう誰かに毒を仕込んだりしたのになって思ってるね」

「そつ言つて麻衣子は僅かに目を細めた。すると奈々瀬はうーん、

と唸って座椅子の背もたれに体を預ける。

「とりあえず様子見だね。他のメンバーがどう出るか見てから動くと思う。だからまだ派手な行動はしてないよ」

奈々瀬は人差し指でこめかみをとんと敲いた。すると隣でくるみも、うんうん頷いてポニーテールを揺らしている。穏健派というか小心者の彼女は、奈々瀬のように攻撃の様子を窺っている訳ではなさそうだ。

「麻衣子はもう動き出してるの？」

秘密、と言った麻衣子は湯気の立つカップに薄い口唇を付ける。カップに隠された口元は笑っているようにも見えなくない。眼鏡の奥の瞳からは内面を読み取る事が出来ず、麻衣子という存在がいやに遠く感じた。

もうポイズンガールは始まっている。

今までのロシアンルーレット形式とは違って、日常のありとあらゆる物にハズレが仕掛けられている可能性がある。つまり二十四時間気が抜けない。自分が口にしようとする物、触れようとする物すべてに仕掛けがあるような気がしてきて、ゲーム開始二日目にして早くも気疲れしてきた。

それにしても上手く出来たルールだね、と麻衣子。彼女はカップをテーブルに置いてから続ける。

「まず一度ハズレを引いても、自分で降参を認めない限り何度でも復帰できるって所が良いよね」

それに対して顔を顰めたのはくるみだった。

「なんで？ 何回も復活してくるんだったら、そんなのいつまで経っても決着が着かないじゃん」

「そう、チマチマやってたらその内飽きてくるよね。そこで三ヶ月って期限があるのよ。三か月以内に他の参加者を降参させるには、いつも通りタバスコやワサビなんかでやってる場合じゃないでしょ。このルールには参加者をエスカレートさせる仕掛けが張り巡らされているってワケよ」

奈々瀬は科学部五人の顔を順々に思い浮かべた。幸か不幸か、今回のポイズンガール参加者は、自分を含めて負けず嫌いが揃っていた。誰一人として自ら負けを認める姿を想像出来ない。これは間違いないくエスカレーターする事が予想される。

「激辛系じゃいつまでも勝負がつかないって言うけど、じゃあ麻衣子はどついう物を使う気なの」

そうねえ、と呟いた麻衣子はヤドクガエルの水槽に目を向ける。

彼女の視線に気付いた奈々瀬とくるみの表情が警戒を示した。麻衣子の冷たい瞳を見ていると首筋が冷たくなる。

「アンタ何考えてんのよ」

奈々瀬が咎めると麻衣子は小さく息を漏らして微かに笑む。普段、鉄仮面のように表情を変えない麻衣子が少しでも口元を綻ばすと妙に幼く見える。

「冗談よ。いくらなんでもアルカロイドは流石にやり過ぎって事ぐらい私にだつて分かるよ」

「当たり前でしょ！」

奈々瀬が顔を顰めて声を荒げてても、麻衣子は飄々として片眉を上げた。するとペットボトルを握りしめたくるみが口を開く。

「でも確かにいつも通りの毒じゃ誰も降参なんてしないよね。だからつて本物の毒物を使わないにしても、いつものよりもキツイ仕掛けをして病院に運ばれたりなんかしたら…大事になるじゃん」

「だから、その為の遺書でしょ」

麻衣子が無機質に言い放った。

彼女の解釈と無味乾燥な考えに奈々瀬達は寒気を覚えた。しかし麻衣子の言うとおりに解釈すると、遺書の意味が表れてくる。昨日アルマは、遺書は雰囲気作りだと言いつつ切っていたが、やはりその他にも遺書の役割はあるらしい。

ゲームがエスカレーターして、たとえ病院に運ばれるような毒を飲んでしまったとしても昨日書いた遺書があれば自殺未遂として片付けられる。そしてゲームは続行される、という事だ。

たとえ誰かが死んでもゲームは止まらない。

「ポイズンガールとは、奈々瀬もまた上手く名付けたものね」

麻衣子は感情のない瞳を奈々瀬に向ける。

麻衣子は友達だ。

しかしここからの三ヶ月に限っては危険な敵の一人だ。麻衣子だけではない、隣にいるくるみにしても同じだ。これからは科学部五人の一挙手一投足に注意を払わなければならない。

仲の良い友達が敵になる。奈々瀬はこのポイズンガールというゲームの本当の意味を知ったような気がした。

「ところで、誰が最後まで残ると思う？」

ふと麻衣子の瞳から冷たさが消えた。つい今まで機械のような冷徹な印象だったのに、もう普段の表情に戻っている。声に抑揚がないのは変わらないが……。彼女の切り替えの速さにはいつも驚かされる。

「奈々瀬なら『優勝は私だ』って言いそうだけど、もし自分以外が最後まで勝ち残るならって考えてね」

腕を組んだ奈々瀬は、再び自分を除いた科学部の顔を思い浮かべる。

ふと隣にいるくるみに目を向けた。

正直くるみが最後まで勝ち残る可能性はないだろうと考える。小心者の上に優しすぎる彼女が、負けず嫌いの他の四人をギブアップさせるような強烈な仕掛けを盛る事は出来ないだろう。

もしくるみが最後の二人まで残るとしたら、逃げて隠れて生き残るパターンが考えられる。彼女の危機察知能力と危機回避能力は小動物並みに発達している。それでも攻撃を仕掛けられない彼女は、やがて畏にかかり負ける。もしくは最後まで逃げ切って引き分け。とにかく彼女が最後の一人になるイメージが出来ない。

「くるみは誰だと思う？」

そう麻衣子に促されたくるみは、しばらく考えた末に口を開く。

「何となくだけど…アルマのような気がする」

奈々瀬と麻衣子は同時に頷いた。

奥山アルマ。

理数科在籍の彼女は、普通科や特進クラスとはまた違った雰囲気を持つている。

さらに別世界の雰囲気を実際立たせているのはその美しい容貌だろう。人形のように整った目鼻立ちに、雪のように白い肌。淡い栗色の髪をした彼女はハーフで、母親がドイツ人らしい。

父親が医者で、彼女自身も幼い頃から医者を志して医者になる為の教育を受けてきた。科学部の中でも最も薬学に精通しているのは彼女で、薬品の扱いにも慣れている。もし、このポイズンガールがエスカレートして本物の薬物まで使用し始めたとしたら間違いない。彼女は脅威になるだろう。

何よりアルマが長けているのは心理戦の強さにある。

従来のロシアアンルーレットで勝負している時も、常にポーカーフェイスで全く感情を表に出さない。そして色素の薄い茶色の瞳でこちらをじっと見ているのだ。勝負の時、アルマの考えている事が全く読めない。

きつと彼女は表情一つ変えず食べ物に仕掛けをして、それを誰かが食べる様子を何食わぬ顔で見ているのだろう。いや、確実な勝利を確信した最後の瞬間だけ上品に笑うかもしれない。

普段は気さくで冗談もよく言う普通の女子高生なのだが、そういった心理戦の時に限って全てが一変する。敵に回すと恐ろしい。

アルマが最後まで残る可能性は十分ある。

「確かにアルマは侮れないね。今までのロシアアンルーレットでもかなり戦績良いし、勝負掛けてくる時のプレッシャーが普通じゃないもん。奈々瀬もアルマが最後まで残ると思うの？」

アルマは強敵だ。しかし奈々瀬は首を横に振る。奈々瀬にとって

の一番の脅威はアルマではない。

「紗季…」とぼつりと呟く。

「やっぱり。奈々瀬はそう言うと思った」

ライバルだもんね、と麻衣子は付け足す。

彼女の傍らにある水槽の中で白いヘビが音もなくオブジェの木に巻きついて、血のように真っ赤な目をこちらに向けた。水槽のヘビは様子を窺っているように奈々瀬の方をじっと見ている。

篠原紗季は蛇の化身だ。

彼女は奈々瀬と同じ特進クラスで、学力テストでも体育の運動能力テストでも、そして科学部のゲームでも全てにおいて奈々瀬と互角だった。周りからはライバル同士と言われ、奈々瀬も紗季の存在をいつも意識していた。しかし紗季はそれ以上だった。

奈々瀬には負けたくない。

その執念が彼女を動かしていた。何かにつけて紗季は奈々瀬と競おうとする。奈々瀬に勝つ事だけを意識して生きていっているとでも過言ではない。紗季のような執念深い女は油断ならない。

ふと昨日のゲームで紗季を下した時の事が脳裏を過る。長い黒髪を床に散らばらせて這いつくばる紗季の目を思い出して鳥肌が立った。

それは蛇そのものだった。

紗季は間違いなく奈々瀬を執拗に狙ってくる筈だ。虎視眈々と期を窺って、油断した途端に彼女の毒牙の餌食となってしまうだろう。仮に今度も彼女に勝てたとしても、こちらも無傷では済まないかもしれない。

「紗季は奈々瀬に勝つまで絶対に降参しないだろうね。私達も三年でもう卒業だし、こんなふうゲームするのも最後になると思う。だから奈々瀬には死んでも勝ちに来ると思うよ」

…死んでも、か。

蛇は首を千切られても、まだ牙を剥いて襲いかかって来ようとする。死んでもという言葉が比喻には聞こえなかった。

「ところで、麻衣子は誰が勝ち残ると思うの？」

話題を進めたのはくるみだった。

自分達の事ばかり話していて、麻衣子の優勝候補者の事を聞いて

いなかった。奈々瀬は甘い香りのジャスミンティーに口を付けて、上目遣いに麻衣子の顔を覗いていた。

麻衣子は、奈々瀬がお茶を飲む様子をじっと見ていた。

「あれ、今日はお砂糖入れないの？ 奈々瀬っていつもならアップルティーでもピーチティーでも、お構いなしにお砂糖入れまくるのに」

「うん。だってポイズンガールは始まつてるんだからね」

奈々瀬がカップを置いて麻衣子の目を見据える。

すると麻衣子の顔が一気に強張った。平和だった部屋は突然空間が歪んでしまったかのように緊張感が溢れる。何が起こっているのかよく分からない様子のくるみは不思議そうに二人の顔を見比べていた。

奈々瀬は湿った口唇を指で撫でる。

「もともとカップには何も入ってなかったし、同じポットから淹れたのを麻衣子も飲んでるから、このお茶はまず安全なんだよね」

でもね……。奈々瀬がそう付け足そうとすると麻衣子の表情が険しくなった。取り繕おうとしているが、顔の筋肉がびくりと引き攣るのを隠しきれしていない。

奈々瀬は砂糖の小瓶を爪で弾く。

「このお砂糖はちょっと信用できないなあ。麻衣子はお砂糖入れてないし。だいたい麻衣子ってさっきからこの瓶ちらちら見過ぎなんだよね」

指摘された麻衣子はぎこちなく瓶から視線を逸らす。すると、くるみが横から手を伸ばして砂糖の小瓶の蓋を開けた。

「奈々瀬、これ普通のお砂糖じゃない？」

二人の顔を窺うようなくなるみの声。奈々瀬は麻衣子の目をしっかりと捕らえたままくるみに答える。

「この瓶に仕掛けをするなら、ぱっと見た感じではお砂糖じゃないってバレないものにしてある筈だよ。だってお砂糖を入れるのは私だし、見ただけでバレるような物なら仕掛ける意味がないからね」

くるみは瓶の中にある粉末を手にとって恐る恐る舐めてみる。

「塩だよこれ！」

やっぱりね、と漏らした奈々瀬は溜息を吐いた。

「こんな事だろうと思っただよ。危ない危ない、気付かずにも通りの量を入れてたら海水みたいになっただね…」

そう言っただけ鋭く麻衣子を睨みつける奈々瀬。

すると麻衣子は開き直ったように笑顔を見せた。もともと表情の乏しい彼女がこんなに笑うのは珍しい。

「もうちょっとで上手く引掛かると思ったんだけどな。やっぱり奈々瀬はただ者じゃないね。まるで野生動物みたいに常に警戒を解かないもん」

一頻り笑うと彼女はまるで電池が切れてしまったように無表情に戻る。そして麻衣子は静かに口を開いた。

「最後まで勝ち残るのは夏川奈々瀬。あなただと思っただよ。不意に名前を呼ばれた奈々瀬の耳がぴくりと反応する。」

「誰が何と言おうと私は奈々瀬が残ると思う。インパクトでは紗季やアルマの方があつかもかもしれないけれど、きつと奈々瀬は爪を隠してるんですよ。いつも私達と一緒にいるけれど奈々瀬だけは別の次元の生き物のような気がする」

「何訳わかんない事言ってるのよ」

苦笑して首を傾げる奈々瀬だが、一方の麻衣子は真剣そのものだ。「奈々瀬。あなた私達に言えない事…あるでしょ」

…言えない事。

思わず奈々瀬は口籠った。

一瞬強張った奈々瀬を、くるみと麻衣子は見逃さなかった。そして麻衣子は機械のような声で言った。

私は奈々瀬が一番こわい。

冗談で言っているのではないようだ。麻衣子は至って真面目な表情で奈々瀬を見据えている。

「こわいって、どういふ事よ」

「何となくそう思うの。奈々瀬は私達とゲームをしている時、本気じゃないのに本気のふりをしてる。大人が子供相手に遊んでいるよな…そんな気がする」

「馬鹿な事言わないでよ。負けたらタバスコだよ、本気に決まってるじゃん。私は常にいっぱいいっぱいだよ！」

しかし麻衣子は怪訝な顔をしていた。うそつき。彼女の目はそう訴えかけているようだった。

三人はふと黙り込んだ。

紅茶が冷めてゆく。

いつまで続くか分からないその気まずい沈黙を破るようにドアが開く。三人は一斉にドアの方を見た。

「あ、お姉ちゃん」

第一声を発したのは麻衣子だった。

「奈々瀬ちゃんとかくるみちゃんが出来たのね」

お姉ちゃんと呼ばれた女性は胸の前で小さく手を振った。奈々瀬とかくるみは軽く会釈をして、おじゃましてますと答える。

麻衣子の姉は、彼女と同じく眼鏡を掛けていて麻衣子よりも少し長い髪型をしている。麻衣子がそのまま大人になったような感じだ。「職場の人のお土産でクッキー貰ったんだけど、みんなで食べなよ」そう言った麻衣子の姉はにんまりと表情を和ませた。

彼女が麻衣子と大きく違う点は、表情が豊かだという事だけだろう。麻衣子の姉はゆっくりとした動作でテーブルにクッキーの缶を置いた。細身のジーンズに包まれたすらりと長い脚、薄手のニットに浮き上がる胸の形。大人の身体だ。

奈々瀬はこっそり自分の胸を触って、少し落胆した。

「アーモンドが乗ってるのは数が少ないから早い者勝ちだよ」

麻衣子の姉が缶の箱を開けると、様々な種類の高級そうなクッキーが詰まっていた。くるみは真つ先にアーモンド入りのクッキーを手に取った。今度は麻衣子が用意したものではないので何の仕掛け

もされていないだろうと、奈々瀬も一つ手を伸ばした。

全員がクツキーを口を含むと、また沈黙が始まった。その静けさに居心地の悪くなった麻衣子は、リモコンを手に取ってテレビをつける。

たとえ誰にも相手をされなくても、テレビは勝手に喋り続けて沈黙を作らないようにしてくれる。奈々瀬は普段あまりテレビを見ないのだが、こういう時テレビもそれなりに便利だと思った。

夕方のニュースが放送されていた。

「あれ？」

頓狂な声を上げたのはくるみだった。

「これって結構近所じゃない？」

調子外れなくなるみの言葉で、他の三人もテレビに注意を向ける。

画面に映し出される場所には奈々瀬も見覚えがあった。

「学校の裏手の鉄工所だ。ほら、隣に高速道路もあるから間違いないと思う」

人気のない通りを五人程の警察官が何やら調べている映像とキャスターの重々しい口調から、良いニュースでない事は容易に想像出来る。やがてキャスターは殺人事件という言葉を口にする。

「最近物騒になったもんだよね」

クツキーをかじりながら、ブラウン管を見詰めて顔を顰める麻衣子の姉。

昨日の真夜中、工場前の通りで男性が鈍器で殴られて、搬送先の病院で死亡した。通報者の話によると、被害者の鮫島という男が何者かと激しく言い争っていたという話だ。

そこで被害者である鮫島翔平の写真が表示された。

「うわあ、チンピラだねえ」

実にどうでも良さそうな感想を述べたのは麻衣子だ。

「チンピラ同士の喧嘩で死人が出るなんて。平和そうなこの街でも夜はやっぱり危険なんだね」と、麻衣子の姉。

眼鏡の姉妹はテレビに向かってこくりと頷いている。

犯人はまだ捕まっておらず、依然逃走中であるらしい。警察も評判よりは優秀らしく、国内で殺人を犯して時効をむかえた例は極めて少ない。犯人はそのまま逃げ切れと思っているのだろうか。

奈々瀬は興味なさそうにテレビを見ていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2028y/>

---

ポイズンガール

2011年11月14日03時18分発行